KIT NO. WL. A031

AKAGI赤城 ウォーターラインシリーズNO.31 航空母艦あかぎ（改装後） JAPAN AIRCRAFT CARRIER

Hasegawa

イラストレーション・上田毅八郎

WATER LINE SERIES

《航空母艦赤城について》

1921年11月13日、日本は最初の空母鳳翔を進水させました。鳳翔は空母として設計された艦としては世界最初の就役艦でイギリスの空母ハーミスの就役よりは9ヶ月早く就役しました。その後ワシントン軍縮条約により、空母の総トン数は81,000トンに制限されました。これにより翔鶴型空母2隻は建造中止となり、代って巡洋戦艦赤城、天城の2隻が27,000トンの空母として建造されることになりました。しかし1923年の関東大震災により、天城が横須賀工廠の船台上で船体を破損したので、代りに廃艦処分される予定の加賀が空母として建造されることになり、こうして1923年11月19日、赤城、加賀の2艦は航空母艦として建造が開始されました。赤城は1927年呉工廠で完成、加賀とともにワシントン条約に基づく、日本海軍最初の大型空母で、特徴ある艤装が施されました。飛行甲板は3段式という日本海軍独特の形態で、最上段が着艦用、中段が小型機発艦用、下段が大型機発艦用となっていました。右舷側下方に傾斜した大型煙突と小型の直立煙突を設けたため、最上段の飛行甲板は左舷側に中心線をずらして設けてありました。このため高角砲スポンソンの支柱型状も、左舷と右舷とでは異なっていました。赤城は1935年10月24日より佐世保工廠にて近代化改装に着手され、1938年8月31日に完成しました。赤城の改装の主要な点はつぎの通りです。(1)飛行甲板は一段とし、甲板はできるだけ延長する。(2)飛行甲板はできるだけスペースを大きくとり、従来の下部格納庫は廃止する。(3)20cm連装砲塔2基は撤去するがケースメートの部分に20cm砲は新設せず、また高角砲はいままでどおりとする。(4)飛行甲板上に、艦橋構造物を新設する。(5)エレベーターは改善増設する。(6)飛行機用の燃料、爆弾、魚雷の搭載量を増加し、関連装置も改善する。以上のような大改装により、赤城は近代空母として生まれかわり、太平洋戦争初期の立役者となったのです。各部の改装の内容は次のようです。艦体はもともと巡洋戦艦であったため、艦体は高速に適する船型だったため、改装時にはぜんぜん手がつけられませんでした。推進機関関係では赤城は改装前ロ号艦本式重油専焼缶11基同じく混焼缶8基合計19基、技本式蒸気タービン4基を持ち、出力132,000馬力で速力32.5ノットであった。改装により缶はロ号艦本式空気予熱器付重油専焼缶8基に換装されましたが、タービンはそのままとされました。したがって出力は133,000馬力とほとんど変らず、改装による艦型増大のため速力は31.2ノットに低下しましたが、航続距離は14ノットで8,000カイリから16ノット8,200カイリに増加しています。煙突は右舷中央部から外側下方につき出した一本煙突に改められ、これにより着艦機への気流の悪影響を防止しました。兵装は改装後20cm連装砲2基が撤去されましたが、25mm連装機銃が14基装備されました。艦橋構造物は煙突と反対側の艦中央部左舷に新設され、この方式は空母飛龍にも採用されましたが、実際使用してみると都合が悪く、その後の空母には採用されませんでした。

赤城の戦歴は次の通りです。　赤城は昭和2年3月25日に竣工していらい、太平洋戦争開始まで一度も戦闘に参加していませんでした。太平洋戦争開戦当時、赤城と加賀は1航戦を編成、赤城は第1航空戦隊旗艦の任につきました。昭和16年11月下旬エトロフ島単冠（ヒートカップ）湾に集結し機動部隊は11月26日に単冠湾を出撃、北方よりハワイに向いました。12月8日の第1航空戦隊の真珠湾攻撃により、米太平洋艦隊は壊滅的打撃をうけました。この作戦には全部で31隻が参加しましたがそれはつぎのような編成でした。

空襲部隊	空母＝赤城、加賀、蒼龍、飛龍、瑞鶴、翔鶴
支援部隊	戦艦＝比叡、霧島　重巡＝利根、筑摩
警戒隊	軽巡＝阿武隅　駆逐艦＝谷風、浜風、浦風、磯風、霰、霞、陽炎、不知火、秋雲
補給部隊	油送船＝極東丸、国洋丸、健洋丸、極洋丸、神国丸、東邦丸、東栄丸、日本丸

昭和17年3月末、連合艦隊はインド洋にて、英国艦隊を撃滅すべくインド洋作戦を開始し、赤城と第5航空戦隊の4隻、合計5隻の空母、戦艦4隻、重巡2隻、その他20隻の南雲艦隊を派遣しました。この作戦で英空母ハーミス、重巡ドーセットシャー、コーンウォール等を撃沈しました。その後赤城、加賀は第2航空戦隊の飛龍、蒼龍を加え、南雲中将の指揮下にミッドウェー攻略作戦が開始されました。5月27日呉を出撃した南雲機動部隊は6月4日ミッドウェー島めざして攻撃隊を発進させました。しかしこのときすでにミッドウェー付近には米機動部隊が待ち伏せており、これの攻撃を受けました。敵急降下爆撃機の攻撃により赤城は3発の命中弾をうけ、艦内は火の海と化し、6月6日午前2時味方駆逐艦の魚雷により処分されました。又加賀は4発蒼龍は3発の命中弾を受け災上沈没、飛龍はヨークタウンを撃破するも4発の命中弾を受け災上、味方駆逐艦の魚雷により処分されました。

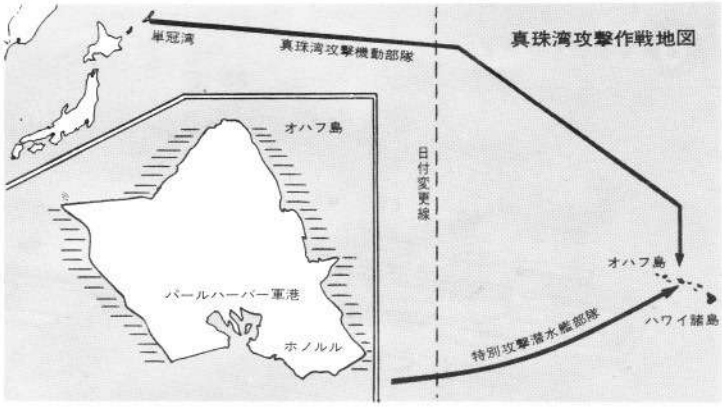
赤城の搭載機

赤城には九七式艦上攻撃機（800kgの魚雷又は800kg爆弾装備）、九九式艦上爆撃機（250kg爆弾1個急降下爆撃機）、及び零式艦上戦闘機が搭載されていました。開戦前の搭載数は零戦24機、九九艦爆24機、九七艦攻12機の合計60機、又開戦時の搭載数は零戦21機、九九艦爆21機、九七艦攻30機の合計72機でした。

太平洋戦争開始とうじの日本の空母は次のような編成でした。

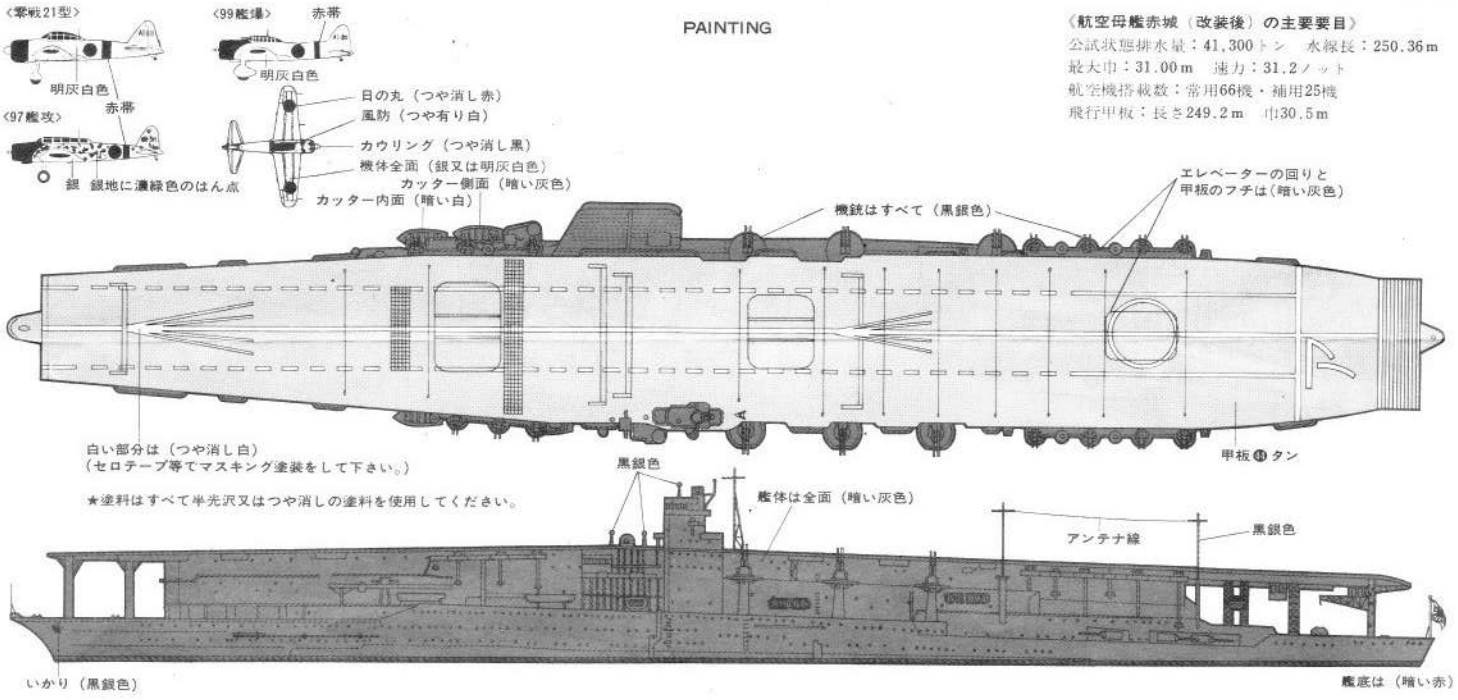
1航戦（赤城、加賀）　2航戦（蒼龍、飛龍）
3航戦（鳳翔、瑞翔）　4航戦（龍驤、春日丸）
5航戦（翔鶴、瑞鶴）　以上10隻で3航戦が第1艦隊に所属し、他の4つの航戦で第1航空戦隊を構成しました。

昭和14年9月	ドイツ、ポーランドに進撃、第2次大戦開始。
昭和15年9月	日独伊三国軍事同盟成立。
昭和16年12月8日	日本軍、ハワイ襲撃。日本、英米に宣戦、太平洋戦争勃発。
昭和17年5月	珊瑚海海戦、米空母レキシントン沈没。
昭和17年6月	ミッドウェー沖海戦に敗る。米軍、ガダルカナル上陸。日本、空母赤城、加賀、蒼龍、飛龍を失う。米空母ヨークタウン沈没。
昭和20年8月	日本、ポツダム宣言受諾。大戦終了。

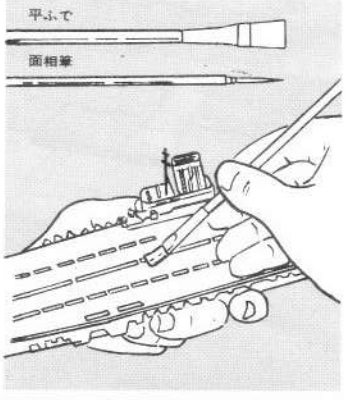


PAINTING

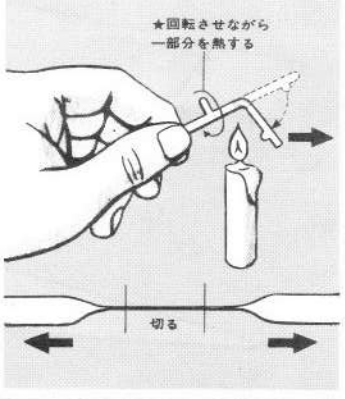
《航空母艦赤城（改装後）の主要要目》
公試状態排水量：41,300トン　水線長：250.36m
最大巾：31.00m　速力：31.2ノット
航空機搭載数：常用66機・補用25機
飛行甲板：長さ249.2m　巾30.5m



《塗装について》
同じ色に仕上がる部品はできるだけ組立てて、部品の合せ目や、はみだした接着剤を修正してから塗装するのがコツです。
塗料はプラスチック用の半光沢又はつや消しの塗料を使用します。ムラなくきれいに塗るにはスプレー式塗料を使うのがよい方法です。塗装する場合一度に仕上げずに、うすく全体を塗り乾いたらまたうすく塗る方法がコツです。
甲板や船体側面のように広い部分は平筆を使い、エントツや飛行機などは、細筆を使います。



《アンテナ線の作り方》
キットをより引きたたせる為にアンテナ線をはりましょう。必ずキットを塗装してからおこないます。
まずランナー（部品が付いていた枝）を適当な長さに切り、ローソクの炎で右図の様にやわらかくなるまで熱します。十分熱したところでローソクから離し、すばやく引っぱると細い糸ができます。
上の2面図を参考にして接着部分より糸を少し長めに切り、マッチ棒の先に接着剤をつけてアンテナに止めます。のこりは接着剤が乾いてから切るのがコツです。



㈱長谷川製作所　静岡県焼津市八楠1193の2　〒425

AKAGI赤城

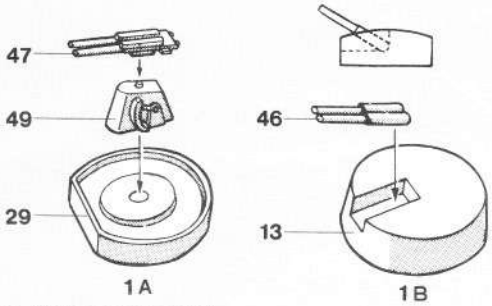
図－8で使用するネームプレート

〈作る前にお読みください〉
★ランナー（枝）から部品を切りはなす場合必ずニッパーかナイフ等を使って、ていねいに切りはなして下さい。★接着剤は組立てる部品の両方に少しづつ付けて接着して下さい。

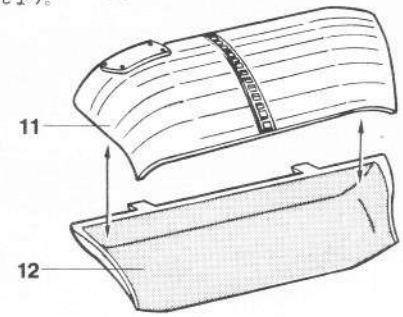
WATER LINE SERIES

1 高角砲のくみたて
1A、1B、を各3組作ります。

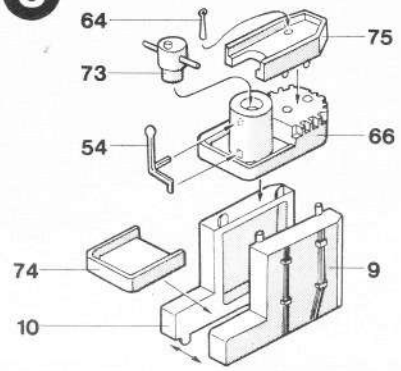
砲身の角度は下図がよいでしょう。



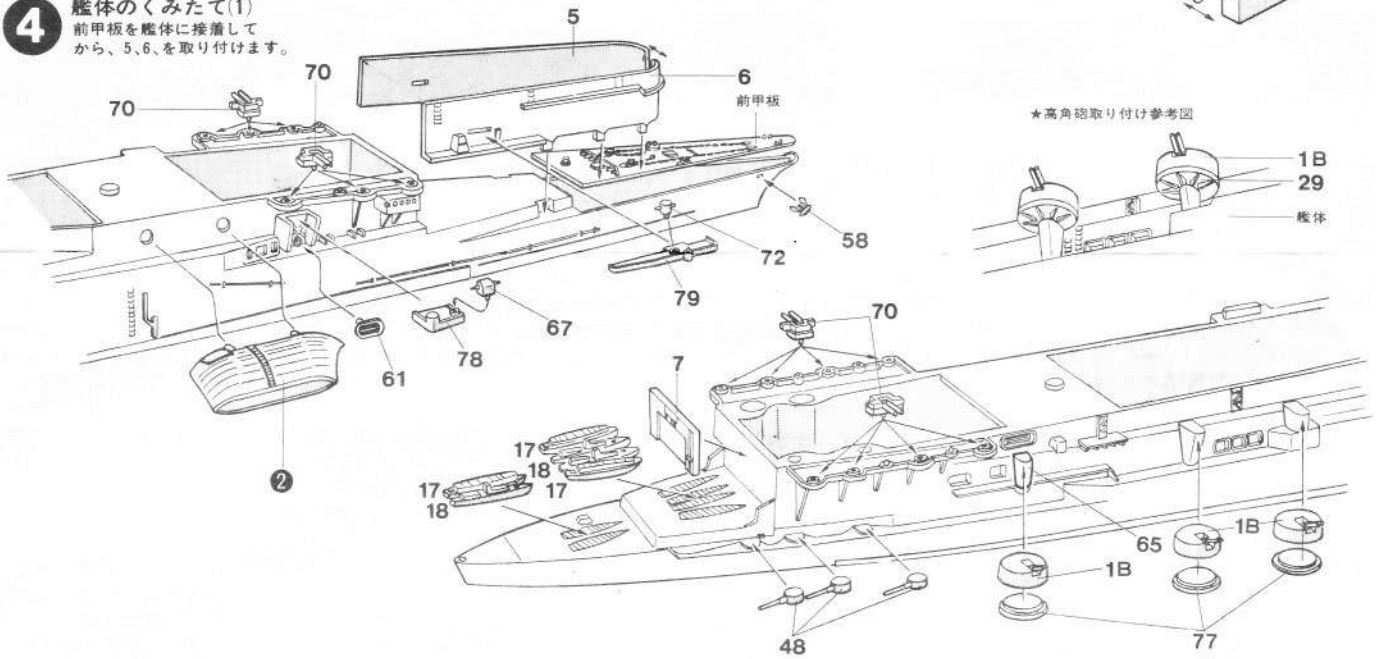
2 エントツのくみたて



3 艦橋のくみたて



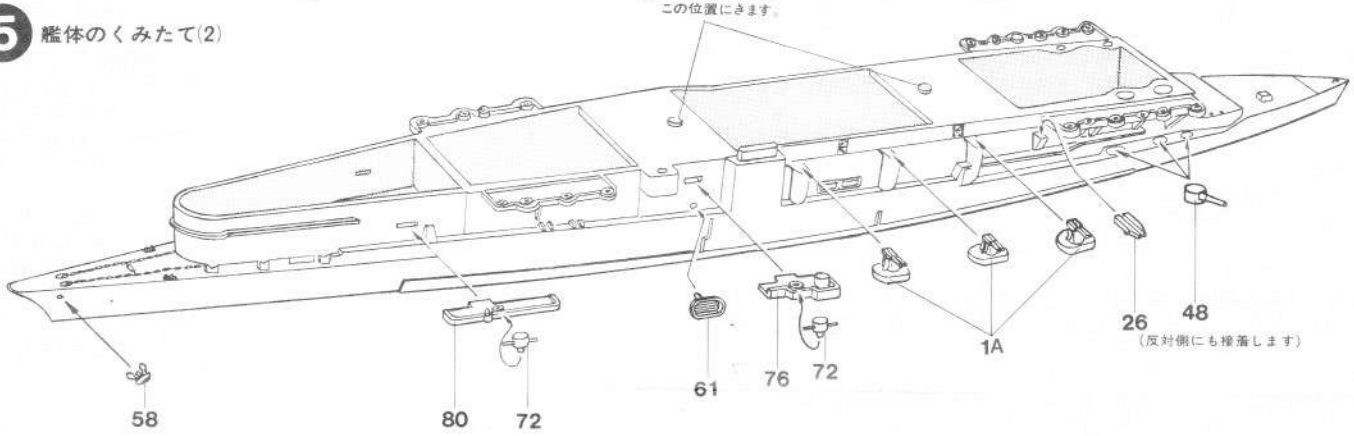
4 艦体のくみたて(1)
前甲板を艦体に接着してから、5、6、を取り付けます。



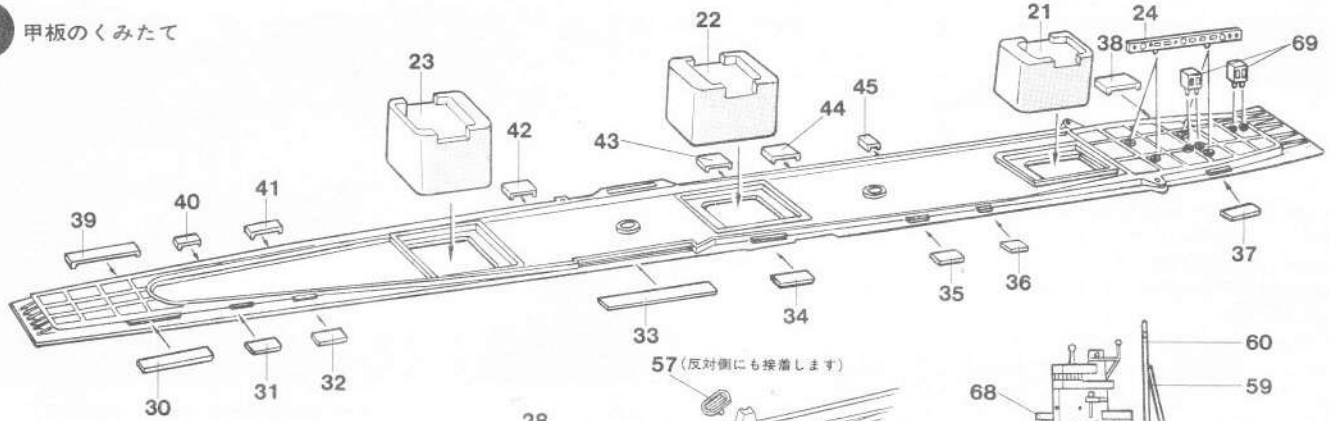
★高角砲取り付け参考図

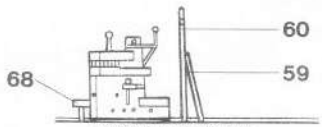
5 艦体のくみたて(2)

★ 甲板裏面の凹穴がこの位置にきます。



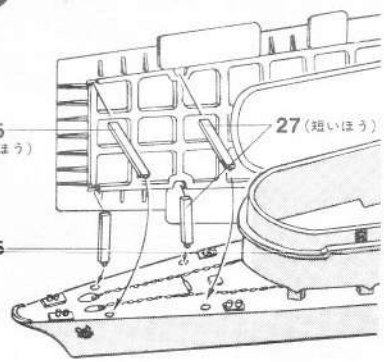
6 甲板のくみたて

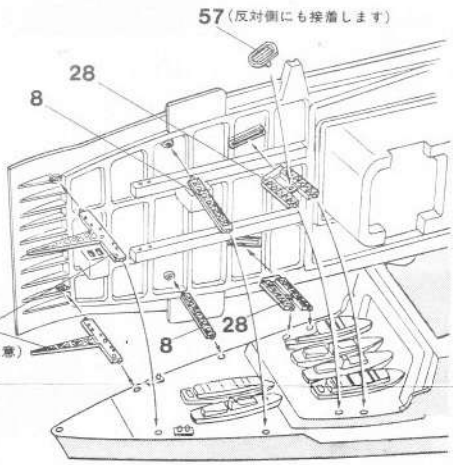


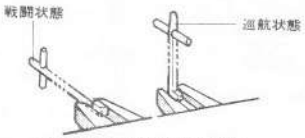


〈艦橋部取り付け参考図〉

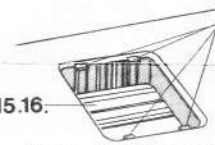
7 艦体のくみたて(1)





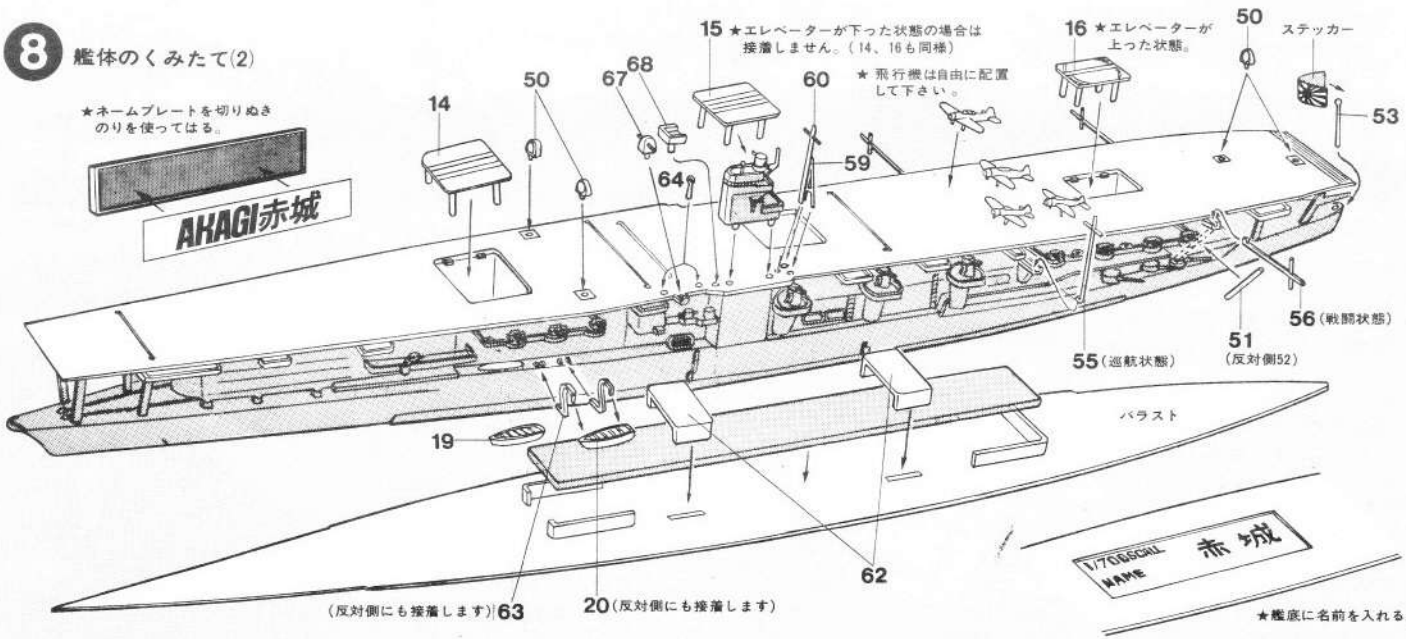


〈アンテナ支柱取り付け参考図〉
(どちらかの状態を選んでください)



〈エレベーター取り付け参考図〉

8 艦体のくみたて(2)



PRINTED IN JAPAN